

新潮文庫

眠れる美女

川端康成著



新潮社

ねむれる美しい女

新潮文庫

草1 = 15



昭和四十二年十二月二十五日 発行
昭和五十七年十月十日 二十七刷

著 者 川 端 康 成

発行者 佐 藤 亮 一

発行所 株式 会社 新 潮 社

郵便 番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(〇三)二六六一五一
編集部(〇三)二六六一五四〇

振替 東京 四一八〇八番

定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

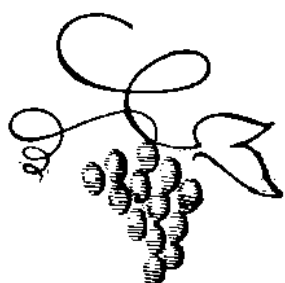
印刷・中央精版印刷株式会社 製本・加藤製本株式会社
© Hideko Kawabata 1967 Printed in Japan

ISBN4-10-100120-0 C0193

新 潮 文 庫

眠 れ る 美 女

川 端 康 成 著



新 潮 社 版

目次

眠れる美女……………五

片腕……………一〇七

散りぬるを……………一三七

解説 三島由紀夫

眠れる美女

眠れる美女

その一

たちの悪いいたずらはなさらないで下さいませよ、眠っている女の子の口に指を入れようとなさったりすることもいけませんよ、と宿の女は江口老人に念を押した。

二階は江口が女と話している八畳と隣りの——おそらくは寢部屋ねぶやの二間しかなく、見たところ狭い下にも客間などなさそうで、宿とは言えまい。宿屋の看板は出していない。またこの家の秘密は、そんなものを出せぬだろう。家のなかには物音ものおともしない。鍵かぎのかかった門に江口老人を出迎えてから今も話してる女しか、人を見かけなかったが、それがこの家のあるじなのか、使われている女なのか、はじめての江口にはわかりかねた。とにかく客の方からはよけいなことを問いかけないのがよさそうである。

女は四十半ばぐらいの小柄で、声が若く、わざとのようにゆるやかなものいいだった。薄い唇くちびるを開かぬほどに動かさず、相手の顔をあまり見ない。黒の濃いひとみに相手の警戒心をゆるめる色があるばかりでなく、女の方にも警戒心のなさそうな、ものなれた落ちつきがあった。桐の火鉢にかけた鉄瓶てつびんに湯がわいている、その湯で女は茶を入れたが、煎茶せんちやの品質も加減も、こういう場所、場合としては、じつに思いがけなく上上なのも、江口老人をほぐれさせた。床には川合

玉堂の——複製版にちがいないが、あたたかく紅葉した山里の絵がかかっている。この八畳間は異常をひそめたけはいがない。

「女の子を起こそうとなさらないで下さいませよ。どんなに起こそうとなさっても、決して目をさましませんから……。女の子は深く眠っていて、なんにも知らないんですわ。」と女はくりかえした。

「娘は眠り通しで、始めから終りまでわからないんでございますからね。どなたとおやすみいたしましたかもね……。それはお氣がねがありませんわ。」

江口老人はいろんな疑いがぎざすのを、口には出さなかった。

「きれいな娘でございますよ。こちらで安心の出来るお客さまばかりにいらしていただいています……。」

江口は顔をそむけるかわりに腕時計に目を落した。

「なん時でございますか。」

「十一時十五分前だね。」

「もうそんな時間でございましょうね。お年寄りみなさん、お早いおやすみで、朝はお早いようですから、いつでもどうぞ……。」と女は立って、隣室へ行く戸の鍵をあけた。左利きであるのかこの時は左手を使った。なんでもないことなのだが、江口は鍵をあける女につられて息をつめた。女は首だけ戸の向うに傾けて、なかをのぞいていた。女はこうして隣室をのぞくのにもなれているのにちがいでなくて、やはりなんでもないうしろ姿なのだが、江口にはあやしいものに見

えた。帯の太鼓の模様にあやしい鳥が大きかった。なに鳥かわからない。これほど装飾化した鳥になぜ写真実風な目と脚しんとをつけたのだろう。もちろん気味悪い鳥ではなく模様として不出来というだけだが、この場の女のうしろ姿に、気味の悪さを絞るとすると、この鳥である。帯の地色は白に近い薄黄だった。隣室はほの暗いようだった。

女は戸を元通りしめると、鍵をかけないで、その鍵を江口の前の机においた。隣室をしらべたという顔でもなく、ものいいも同じだった。

「これが鍵でございますから、ごゆっくりおやすみ下さいませ。もし、寝つきがお悪いようでしたら、枕もとに眠り薬がおいてございます。」

「なにか洋酒はないの？」

「はい。お酒はお出しいたしません。」

「寢酒に少しでもいけないのかね。」

「はい。」

「娘さんは隣りの部屋にいるの？」

「もうよく眠って、お待ちしております。」

「そう？」江口は少しおどろいた。その娘はいつ隣室へはいつて来たのだろうか。いつから眠っているのだろうか。女が戸を細目にあけてのぞき見たのは、娘の眠りをたしかめたのだろうか。しかし娘が寝入りこんで待って、そして目覚めないなどということは、この家を知る老人仲間から聞いてはいたものの、江口はここに来てみて、かえって信じられぬようだった。

「こちらでお着かえなさいますか。」それなら女は手つだうつもりらしい。江口はだまっていた。

「波の音がいたしますね。風も……。」

「波の音か。」

「おやすみなさいませ。」と女は言って引き取った。

ひとり残されると、江口老人は種もしかけもない八畳間を見まわしてから、隣室へ行く戸に目をとどめた。半間の杉の板戸だった。この家を建てた時からのものでなく、後でつけたらしい。そう気がついて見ると、隔ての壁ももとは襖だったのを、「眠れる美女」の密室とするために、後で壁に変えたのかと思われる。その壁の色はほかと合わせてあるが新しいようだ。

女がおいて行った鍵を江口は手に取ってみた。ごく簡単な鍵だ。鍵を持つのは隣室へ行く支度のはずだが、江口は立たなかった。女も言ったが、波の音が荒い。高い崖を打つように聞える。

この小さい家がその崖のはずれに立っているように聞える。風は冬の近づく音である。冬の近づく音と感ずるのは、この家のせい、江口老人の心のせいかもしれない。火鉢だけで寒くはない。暖い土地でもある。風に木の葉の散るけはいはない。江口は夜おそくこの家に來たので、あたりの地形はわからないが、海の匂いはしていた。門をくぐると、家のわりに庭が広くて、松ともみじのかなり的大木が多かった。小暗い空に黒松の葉が強かった。前は別荘だったのだろう。

江口は鍵を持ったままの手で煙草に火をつけると、一吸い二吸い、ほんのさきだけで灰皿に消していたが、つづけて二本目はゆっくりと吹かした。軽い胸騒ぎの自分をあざけるよりも、いやなむなしさが強まった。ふだん江口は洋酒を少し使って寝つくのだが、眠りは浅く、悪い夢を見

がちだった。若くて癌で死んだ女の歌読みの歌に、眠れぬ夜、その人に「夜が用意してくれるもの、墓、黒犬、水死人のたぐい」というのがあったのを、江口はおぼえたと忘れられないほどだった。今もその歌を思い出して、隣りの部屋に眠っている、いや、眠らせられているのは、「水死人のたぐい」のような娘ではないのかと思うと、立って行くのにためらいもあるのだった。娘がなにで眠らせられているか聞いてはいないが、とにかく不自然な前後不覚の昏睡におちいつているらしいから、たとえば麻薬におかされたような鉛色に濁った肌で、目のふちはくろずみ、あばら骨が出てかさかさ痩せ枯れているかもしれない。ぶよぶよ冷めたくむくんだ娘かもしれない。いやな紫色によれた歯ぐきを出して、軽いいびきをかいているかもしれない。江口老人も六十七年の生涯のうちには、女とのみにくい夜はもちろんあった。しかもそういうみにくいことの方がかえって忘れられないものである。それはみめかたちのみにくさというのではなく、女の生のふしあわせなゆがみから来たものであった。江口はこの年になって、女とのみにくい出合いをまた一つ加えたくはない。この家に来ていざとなって、そう思うのだった。しかし眠られ通して目覚めない娘のそばに一夜横たわろうとする老人ほどみにくいものがあるか。江口はその老いのみにくさの極みをもとめて、この家に来たのではなかったか。

女は「安心出来るお客さま」と言ったが、この家に来るのはみな「安心出来るお客さま」のようだった。江口にこの家を教えたのもそういう老人だった。もう男でなくなってしまった老人だった。その老人は江口もすでおなじ衰えにはいつているかと思ひこんだらしい。家の女はおそらくそういう老人たちばかりあつかいなれているから、江口にあわれみの目を向けることはしなか

ったし、さぐりの目色を見せることもなかった。しかし江口老人は道楽をつづけているおかげで、女の言う「安心出来るお客さま」ではまだないが、そうであることは自分で出来た。その時の自分の気持しだい、場所しだい、また相手によった。これにはもはや老いのみにくさが迫り、この家の老人の客たちのようなみじめさも遠くないと思っている。ここへ来てみたのもそのしるしにほかならない。それだから江口はここでの老人たちのみにくい、あるいはあわれな禁制をやぶろうとはゆめゆめ考えてはいなかった。やぶるまいと思えば、やぶらないで通せる。秘密のくらぶとでもいうのだろうが、会員の老人はすくないらしく、江口はくらぶの罪をあばきにも、くらぶのしきたりをみだしにも来たのではなかった。好奇心もさほど強くはたらないのは、すでに老いのなさけなさである。

「眠っているあいだに、いい夢を見たとおっしゃるお客さまもございますよ。若い時を思い出したとおっしゃるお客さまもございますよ。」と、さっきの女の言葉が浮かんで来ても、江口老人はにがいに笑いも出ない顔で、机に片手をついて立ちあがると、隣室へ通じる杉戸をあけた。

「ああ。」

江口の声が出たのは、深紅^{しんく}のびろうどのかあてんだった。ほの明りなのでその色はなお深く、そしてかあてんの前に薄い光りの層がある感じで、幻のなかに足を踏み入れたようだった。かあてんは部屋の四方に垂れめぐらせてあった。江口がはいった杉戸もかあてんにかくれるはずで、そこにかあてんのはしがきぼってあった。江口は戸に鍵をかけると、そのかあてんを引きながら、眠っている娘を見おろした。眠ったふりではなくて、たしかに深い寝息にちがいないと聞え

た。思いがけなかった娘の美しさに、老人は息をつめた。思いがけないのは娘の美しさばかりではない。娘の若さもあった。こちら向きに左を下に横寝している顔しか出ていなくて、からだは見えないのだが、二十前^{はたち}ではないだろうか。江口老人の胸のなかに別の心臓が羽ばたくようだった。

娘は右の手首をかけぶとんから出して、左手はふとんのなかで斜めにのぼしているようだったが、その右の手を親指だけが半分ほど頬の下にかくれる形で、寝顔にそうて枕の上におき、指先きは眠りのやわらかさで、ここもち内にまがり、しかし指のつけ根に愛らしいくぼみのあるのがわからなくなるほどにはまげていなかった。温い血の赤みが手の甲から指先きへゆくにつれて濃くなっていた。なめらかそうな白い手だった。

「眠ってるの？ 起きないの？」江口老人はその手にさわるためかのように言ったが、掌のなかに握ってしまって、軽く振ってみたりした。娘が目をさまさないのはわかっていて、手を握ったまま、いったいこれはどういう娘なんだろうと、江口はその顔を見た。眉も化粧荒れはしていないし、閉じ合わせたまつげもそろっていた。娘の髪の毛の匂いがした。

しばらくして波の音が高く聞えたのは、江口が娘に心を奪われていたからである。しかし思いきって着がえをした。部屋の光りが上から来ていることにはじめて気づいて見あげると、天井に明取り^{あかりと}が二つあいていて、その日本紙から電燈の光りがひろがっているのだった。深紅のびろろどの色にはこんな光りがいいのか、またびろろどの色に映えて娘の肌を幻のように美しく見せるのかと、心のゆとりのない江口はゆとりありげに考えてみたが、娘の顔色にびろろど色がう